2015 年冬

福島を感じて考えるスタディツアー

「スタ☆ふく」東和田舎暮らしツアー2015

東和発“和”で繋げる暮らしのススメ

～進化し続ける農村がここにある～

活動報告書

2015 年 3 月

企画：スタ☆ふくプロジェクト

助成：住友商事　東日本再生ユースチャレンジ・プログラム—活動・研究助成—2014 年度
公益法人協会　「東日本大震災　草の根組織応援基金」　助成対象事業

目次

0. 目次--2

1. はじめに---3

2. 企画背景---4

3. 企画趣旨・目的---5-6

4. 組織構成---7-8

5. ツアー詳細---9-21

①概要--9

②アンケート結果---10

③参加者の声---11

④ツアー行程---12-15

⑤東和キャッチコピー集--16

⑥担当者の声---17-20

⑦本ツアーの価値・評価--20-21

6. 広報／メディア掲載について---22-23

7. ご協力いただいたみなさま---24

8. 総括---25-26

9. 問い合わせ先---27

1. はじめに

福島のリアルを感じてもらえるようなツアーをつくろうと、2012 年 4 月から始まった『スタ☆ふく』のツアーも今回で 12 回目を数えることとなりました。「スタ☆ふく東和田舎暮らしツアー2015～進化を続ける農村がここにある～」と銘打った今回のツアーは、16 名のお申込みをいただきツアーを実施することができました。東和でのツアー催行は、私たちの団体では最多の 4 度目となります。毎回テーマを変更しながらツアーを作っており、これも本企画に多くの方のご理解・ご協力いただいているおかげであります。そんな方々へ感謝の意を込めつつも、より多くの方々に私たちの活動を知っていただくべく、この報告書を作成しました。この報告書が、私たちの活動を知るきっかけとなれば幸いです。

1 日目　郷土料理体験後の集合写真―隠津島神社の参宿所にて―

2. 企画背景

「福島の現状を、実際に見て体験することで、福島への関心を深めてほしい。」という思いのもと、2012 年 4 月 JASP(Japan All Student Project)という団体の 1 プロジェクトとして発足し、企画されたのが"福島を感じて考えるスタディツアー「スタ☆ふく」"でした。

これまで、いわき市・二本松市・会津若松などの県内 7 か所で計 11 回、参加者 270 名を動員するツアーを実施してきました。地域の人々との交流に重点を置いたプログラムを通して、福島のありのままの現状を伝えることや、その地特有の課題に向き合う人々の「生の声」を発信していくことで、風評被害の払拭や福島への関心の高度化などをはかり、震災からの復興や地域活性化の一助となるようなツアーの企画にあたっております。参加者ならびに地域関係者からは「今後とも継続的にツアーを実施してほしい」という声を多くいただきます。

企画者自身の私たちが、一番に「福島」から学ぶこと、そして、福島の「リアル」を発信し、ツアー参加者や地域の方々と共に「復興とは」ということや、福島や各地域の「未来」について、今後も考え続けていきたいと考えております。地域と参加者をつなぐ架け橋となれるよう、今後も継続的に活動をしていきます。

今冬の「東和田舎暮らしツアー2015」は福島県二本松市東和地区で行われました。この地域でツアーを行うのは今回で4度目となります。震災から4年という月日が経ち、5 年目に突入しようというなかで、風評被害など震災の影響は未だ続いています。そんななか、今回は東和地区で「農村・東和の暮らし」というテーマで企画を行いました。外部から人が来ることで地域に刺激がもたらされ、参加者にとっては、東和の暮らしにふれて感じた事を自身の今後の生き方や暮らしにつなげてほしいという想いから企画にあたりました。そして、地域の方々の姿や想いや現状に触れてもらうことを通して地域と新たにつながりを持つ人を創出することで、東和の課題でもある若者のパワー不足（数、活動力）の一助となり、結果として地域のより良い発展につながれば、と考えたことが本ツアー企画実施に至った背景となります。

3. 企画趣旨・目的

二本松市東和地区は震災以前より、地域の方が主体となってまちづくりに取り組んできました。地方の過疎都市が抱える、「少子高齢化問題、若者世代の人口流出、第一次産業従事者の低下・・・」といった問題に常に、地域に暮らす自分たちで取り組み、行動を起こしてきたのが東和地区です。その姿勢は震災後も変わらず、震災以降も有機農業やまちづくり、新規就農支援等に力を入れ確実な実績を生み出しています。また、震災後は農家民泊という新たな取り組みが始まり、今も年々数が増えています。このツアーでは「暮らし」をテーマに企画してきましたが、その中身は東和で暮らす“人”に焦点を当てています。

震災の実害・風評被害は計り知れないものではありますが、それでも現状をしっかりと見つめ前に進みつづけている東和の人々、いわば自分たちにとってのピンチをチャンスへと変えていく姿や想いを感じて考えてもらうことが、福島に限らず少子高齢化問題や後継者不足といった課題を抱える人々や、それらの課題解決を担っていく若い世代に、課題先進地域と言われている福島の地域として発信していくべき姿なのではないかと考えました。そして、地域の課題の一つでもある若者のパワー不足（数、活動力）の一助につなげるために、訪れてみなければわからない現状やそこに生きる人の想いを感じてもらうことや地域の人とのつながりをつくることで、これからも東和につながり続けてくれる東和のファンのような存在を創出する事を目的としています。

＜企画目的＞

〇東和の後継者不足、若者のパワー不足の一助となるツアーとする
〇地域(福島)の様子を外部に向けて発信する
〇地域と外部が今後もつながるきっかけづくり
〇東和地域と当団体の継続的なつながり

＜企画目標＞

〇定性目標
・東和の人々や暮らし、取組について知ってもらう
・東和に関心を持つ人材の創出
・参加者と地域の方々とのつながりの創出

○定量目標
・参加人数 15 名以上
・参加者満足度 90%以上

＜企画コンセプト＞

○都会ではできない、農村の今の暮らしを体験する
　参加者に東和地域の暮らしを体験し、農村の今の暮らしを体感してもらう
○東和を知る
　課題解決に向けて、まずは東和での活動、東和の生活知ってもらう
○暮らしの提案をする
　新規就農者が多いという特徴を生かし、東和での様々な暮らし方を知ってもらい、参加者の今後の生活に生かしてもらえるようなものとする

―下見に訪れ、お話を聞くツアーメンバーの様子―

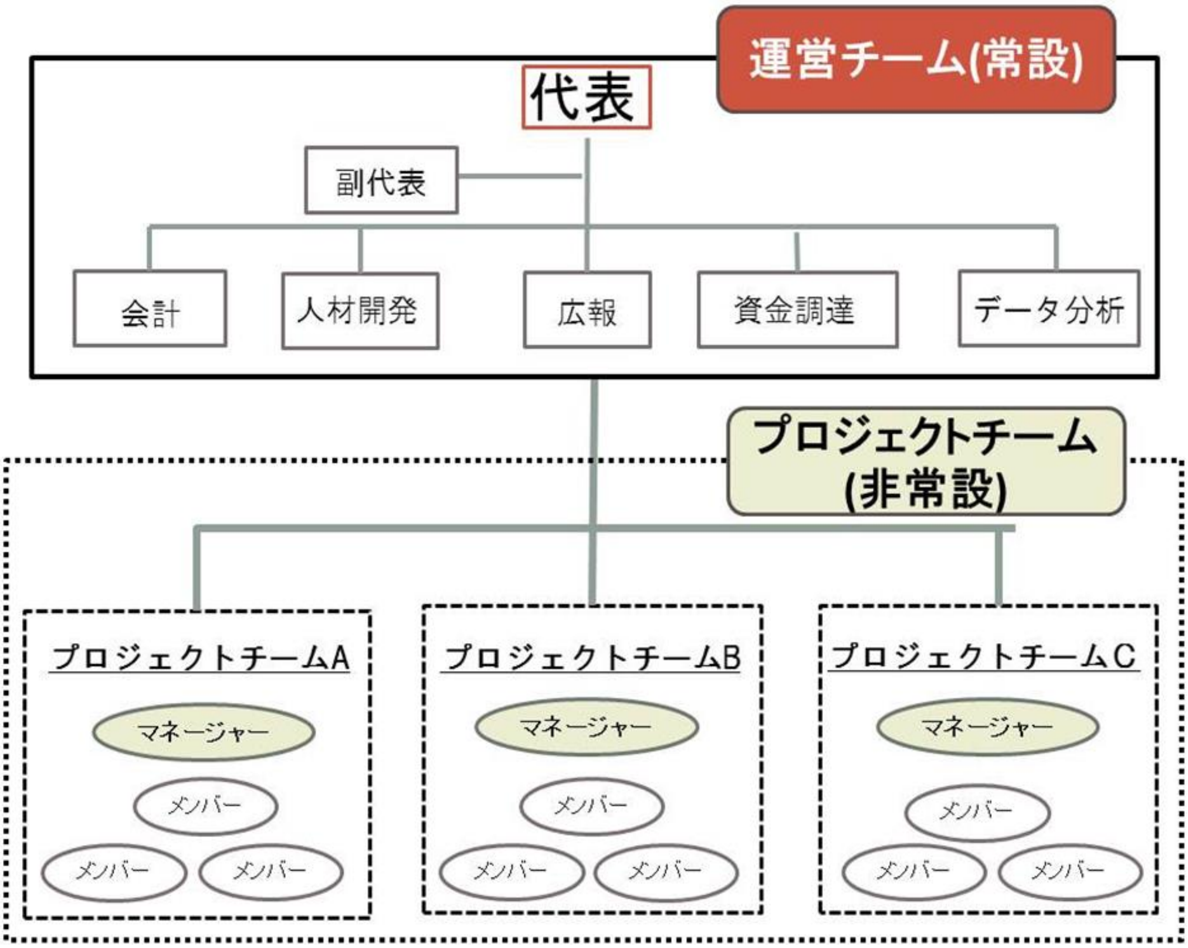
4. 組織構成

『スタ☆ふくプロジェクト』は 2013 年 4 月に母体団体であった『全国学生プロジェクト(JASP)』から分離独立しました。スタディツアー事業の活動開始は 2012 年 4 月であり、これまで福島県いわき市、二本松市、喜多方市などでスタディツアーを実施してきました。全メンバーが福島大学の学生によって組織された組織で、2015 年 3 月 1 日現在 15 名で活動を展開しています。

【ビジョン】
「先進的な地域活性化モデルとしての福島」

【受賞歴】
2013 年 6 月　観光庁主催『若者旅行を応援する観光庁官賞「東北ブロック賞」』受賞

【組織図】



【構成メンバー（2015 年 3 月 1 日現在）】
～運営チーム～

代表	吉田江里	人間発達文化学類 3 年
財務	武藤茉奈美	人間発達文化学類 3 年
人材開発	遠藤はるひ	行政政策学類 3 年
広報	羽賀さやか	行政政策学類 2 年
データ分析	阿部晴佳	行政政策学類 2 年

～活動メンバー～

安斉舞	行政政策学類 3 年
黒澤和也	経済経営学類 2 年
國分花菜	経済経営学類 3 年
霜山翼	共生システム理工学類 2 年
十日市大貴	共生システム理工学類 2 年
田辺将大	共生システム理工学類 2 年
三浦菜生	行政政策学類 2 年
吉田光希	経済経営学類 3 年
渡邊啓太	経済経営学類 4 年
渡部直子	人間発達文化学類 2 年

プロジェクト開始：2012 年 4 月　　団体発足：2013 年 4 月
【過去のスタディツアー～】

2012 年 8 月	「スタ☆ふく水産漁業ツアー」	いわき市　(32 名動員)
2012 年 9 月	「スタ☆ふく観光ツアー」	喜多方市　(27 名動員)
2012 年 9 月	「スタ☆ふく農業ツアー」	二本松市　(25 名動員)
2012 年 12 月	「スタ☆ふく冬ツアー」	二本松市(18 名動員)
2013 年 8 月	「スタ☆ふく水産漁業ツアー2013」	いわき市(37 名動員)
2013 年 9 月	「スタ☆ふくまちづくりツアー」	二本松市（33 名動員）
2013 年 11 月	「スタ☆ふく福島の子どもツアー」	郡山市（15 名動員）
2013 年 11 月	「スタ☆ふく福島の食ツアー」	福島市（12 名動員）
2014 年 8 月	「スタ☆ふく保原×霊山おたのしみイベント」	伊達市（20 名動員）
2014 年 8 月	「スタ☆ふく水産漁業ツアー」	いわき市（32 名動員）
2015 年 2 月	「スタ☆ふく日本酒ツアー」	会津若松市/坂下町（19 名動員）

【団体連絡先】
〒960-1296　福島県福島市金谷川 1　福島大学学生課　「スタ☆ふくプロジェクト」
Mail：suta.fuku@gmail.com

5. ツアー詳細

①概要

【タイトル】
「東和田舎暮らしツアー2015」東和発“和”で繋げる暮らしのススメ
〜進化を続ける農村がここにある〜

【実施日】
2015 年 2 月 28 日（土）〜3 月 1 日（日）

【実施場所】
福島県二本松市

【参加者動員数】
計 13 名

【参加スタッフ】
渡部直子（プロジェクトマネージャー・福島大 2 年）
三浦菜生　（福島大 2 年）
武藤茉奈美（福島大 3 年）
吉田江里　（福島大 3 年）
遠藤はるひ（福島大 3 年）
霜山翼　　(福島大 2 年)
田辺将大　（福島大 2 年）
羽賀さやか (福島大 2 年)

＜参加料金＞
16,500 円(学生先着 12 名には学生料金適用で 8,500 円)

②アンケート結果

○ツアー満足度全体平均
3.8 / 4.0　ポイント

	悪			良		
	1	2	3	4	計（人）	平均
①　ツアー全体について			1	11	12	3.9
②　ツアー料金について			5	7	12	3.6
③　タイムスケジュールについて		2	1	9	12	3.6
④　お食事について			1	11	12	3.9
⑤　コンテンツ内容について		1	2	9	12	3.7
⑥　宿泊先について				12	12	4
⑦　スタッフ対応について			2	10	12	3.8
					全体平均	3.8

4⇒満足
3⇒どちらかといえば満足
2⇒どちらかといえば不満足
1⇒不満足

○ツアー参加者状況　　　　　（参加者回答母数＝12）
若年層比率　83％（10～20 代合計）
学生：社会人　＝　2:1
県内：県外　＝　1:3

③参加者の声（一部抜粋）

・まだ放射性物質が残っていて、戦っていること、風評被害をなくせるようにしたいと思った。新規就農者の方、Uターン就農者、ずっと住んでいる方から意見を聞けて参考になりました。郷土料理や民宿など生活を感じられてうれしかったです。
（20 代、女性）

・東和には、働きたい人が働ける環境やサポートがあること。なかなか民泊や地域の人との交流など、参加できないので、いい機会をいただきました。（30 代、男性）

・農業をされている方、ワイナリー農園の方々の熱い思いを聞ける機会があったこと。私は東和や農業について知識はありませんでしたが、今回様々な話を聞いて、興味を持つことができ、自分自身の地域を見直したいと思った。周りに流されて生きてきた自分を見直すきっかけを得ることができました。（20 代、女性）

・東和のまちを知れるだけでなく、そこに住んでいる方との交流ができたので、そういった方を通しても、東和の魅力を感じることができました。住んでいる方とゆっくりと話をできたことは、このツアーに参加したうえで、私の大きな財産となりました。
（20 代、女性）

・東和の他の地域との違いが、なんとなく理解することができた。冬だから仕方ないがもっと東和の畑といった、いろんなところを周ることができたらよかった。
（20 代、男性）

・東和産のお米を同級生の家から直接買って食べているので、東和の農業のあり方を実際に確かめられて、話も聞けて、安全や安心な野菜や米、その他を自分で納得したかったので、良かったです。（40 代、女性）

④ツアー行程

時間	行程	Comment

1 日目 2 月 28 日（土）

10：30	郡山駅集合	スタッフが笑顔でお出迎え。 “みなさん、2 日間どうぞよろしくお願いします！”
11：30	二本松駅到着	
12：40	昼食＆自己紹介	昼食を食べながら、一人ひとり自己紹介をしました。
13：10	講演会 「東和が地域づくりで有名である理由とは？その根底には何があるの？」	NPO 法人ゆうきの里ふるさとづくり協議会理事長の武藤一夫さんから、ゆうきの里の取り組み、東和地区の農業などについてのお話を伺いました。

14：10	東和地域住民との対談	2 つのグループに分かれ、東和生まれ，東和育ちである武藤一夫さん、大野達弘さん、新規就農者として移住してきた小林正典さん、菅野瑞穂さんから普段の東和での暮らしについての話を聞きました。参加者からは疑問に感じたことや気になったことについて質問も多く出ました。
15：25	料理体験	2 つのグループに分かれ、東和地域の伝統料理である“ざくざく”と“凍み大根”を東和のお母さん方と一緒に作りました。そのあとに全員で“三食ちらし寿司”を作り、アイデア豊かなそれぞれのちらし寿司からグランプリを決定しました！

17：10	懇親会	料理体験でつくった東和の伝統料理や地ビールやワイナリーで作られたシードルを囲んで，地域の方・参加者の方と交流しました。参加者と地域の方が仲良くなっている姿が印象的でした。
16：55	各農家民泊先へ	参加者・スタッフが 4 つに分かれ農家民泊。民宿ごとに素晴らしいおもてなしがあり、民泊先の方々との交流は日付が変わるころまで続きました。

2 日目 3 月 1 日（日）

9：45	ワイナリー訪問・見学	ふくしま農家の夢ワインを訪問し，製造施設を見学しました。その後、関元弘さんと斎藤誠治社長から、ワイナリー設立の経緯、設立の想い、今後の展望などのお話をいただきました。ワイナリーでつくられたワインやシードルを購入する時間もありました。

11：30	昼食	道の駅東和あぶくま館へ移動し、「あだたら恋カレー」をいただきました。
13：45	まとめ・ふりかえり	グループに分かれ、二日間を通して感じた東和の魅力、東和に対するイメージの変化を話し合い、お互いに共有しました。最後に「東和キャッチコピーを考えよう」という質問を各自で考えてもらい、一人ずつ全体で発表していただきました。
15：05	二本松駅参加者解散	“2 日間お疲れ様でした！”

⑤東和のキャッチコピー集

ツアーのまとめ・振り返りの時間に今回のツアーにご協力いただいた地域の方、参加者、スタッフで「東和のキャッチコピーを考えよう」という内容の振り返りを行った際に出された東和のキャッチコピーを以下に記載します。

No.	キャッチコピー	属性	性別	年齢	現住所
1	東和で本当の「人」になりませんか？	参加者	男性	20 代	宮城
2	永遠（とわ）に生きる東和の暮らし 魅力がたくさん笑顔の町	参加者	女性	20 代	大阪
3	素材が生きてる東和町	参加者	女性	20 代	福島
4	人が作る東和 人を作る東和	参加者	女性	20 代	兵庫
5	共に生きてゆけるまち	参加者	女性	20 代	宮城
6	あぶくまの恵みが輝くとうわの宝の山	参加者	男性	20 代	福島
7	想いを形に ～一人ひとりが自分らしく～	参加者	男性	20 代	宮城
8	ずっと東和が好きだった！	参加者	女性		東京
9	100%使い尽くし 100%飲み仲間を目指す町	参加者	男性	30 代	
10	あたたかい。自分で自分を生きていける場所。	参加者	女性	20 代	福島
11	たすけあい、たかめあい、自分で創る豊かな暮らし	参加者	女性	10 代	宮城
12	あなたらしさが地域らしさになる場所。	参加者	男性	20 代	東京
13	石ころを磨いて楽しむ東和人	地域の方	男性	60 代	福島
14	空き家の数だけ夢叶う	地域の方	男性		福島
15	東和の里山・夢ランドへようこそ	地域の方	女性	20 代	福島
16	東和と人 人と東和	スタッフ	女性	20 代	福島
17	行きたくなるより会いたくなる場所	スタッフ	女性	20 代	福島
18	夢を夢で終わらせない暮らしがある！	スタッフ	女性	20 代	福島
19	生かされるではなく”生きている”自分から始められる場所	スタッフ	男性	20 代	福島

※「地域の方」は振り返りに参加いただいた関係者の方々、「スタッフ」はスタ☆ふくスタッフを指し、住所は現住所、年齢は 2015.03.17 現在のものです。不明な部分の記載は控えさせていただきました。

⑥企画担当者の声

震災を経験し、この被災地という場所に立地している福島大学に入学したからには、何か福島のために活動したいという思いからスタ☆ふくプロジェクトに入り、初めて中心として作り上げたツアーがこの東和ツアーでした。

もともと福島県の福島市出身で、昔から東和地域の存在は知っており、足を運んだこともありました。しかしこんなにも活動的で地域のために活動している人が多くいることは、何度かリサーチに訪れることで初めて知ったことでした。福島県にも東和のような地域づくりの先進地域があるということに、まず驚きました。スタ☆ふく自体、以前から東和とのつながりがあったこともあり、地域の方々がツアーへの協力も快く引き受けてくださり、東和地域全体の温かさのようなものを感じていました。

今回のツアーでは参加者と地域の人との交流という部分に重点を置き、進めてきました。しかしツアーという限られた時間の中での交流で人の魅力を伝えるというのは思ったよりも難しく、当日まで悩んでいたところでした。東和の人と出会い、話をすることで感じる魅力というものを、自分自身の口から説明する難しさを、広報担当として発信するうえで感じていました。

しかし、ツアーを終え参加者の声を聴くと、少ない時間の中でも伝わったものはある、と感じることができました。それは、ツアーの最後に参加者の皆さんに考えてもらったキャッチコピーを見ても強く感じます。それぞれが一番印象に残った東和地域の魅力があり、それを伝える一言を考えてくださりました。このツアーを行った意味を感じることができました。

震災から4年がたち、5年目を迎えた今、どうしても「震災」という言葉は薄れつつあると感じています。今回のツアーでも震災というキーワードにはあまり重点を置かずに企画を進めてきました。もちろん、今後何年たっても震災と今の生活を完全に切り離して考えることはできないと思います。しかし「復興」という目的だけではなく、今後もこうして福島を伝えていくことは福島の発展にとっても、非常に大切なことであり、続けていくべきことなのではないかと今回ツアーを通して感じることができました。

初めてのツアーを終え、改めて自分の未熟さや足りない部分を見つけることができたと思います。準備から当日まで反省しなければいけない部分は数えきれないほどあります。しかし、こうして一つの地域についてたくさん考え、多くの地域の方と関われたのは今後の私の人生の大きな財産になると感じています。

今回のツアーは本当に多くの地域の方のご協力のおかげで企画実施ができました。関わっていただいた地域の皆様はじめ多くの方に感謝しています。本当にありがとうございました。

東和田舎暮らしツアー2015担当
福島大学2年　三浦菜生

「東和にはやりたいことを自分たちで実現させる活発的な人がたくさんいるんだよ！」
「福島大学にいて、スタ☆ふくに入っていて東和に行かないなんて絶対損してる！！」

宮城県出身の私が、縁もゆかりもない東和を知ったきっかけはスタ☆ふくプロジェクトでした。東和ツアーのプロジェクトメンバーにきまり、下見を重ねていくうちに「もっとこの人の話を聞いてみたい」と、どんどん東和の魅力にはまっていったような気がします。こんなに魅力的な人がいることをもっとたくさんの人に知ってもらいたい。東和の暮らしをありのままに伝えたい。その想いを胸にツアーを企画していきました。響く人は必ずいるはずなのに、どう伝えれば東和の良さが伝わるのだろうか。悩みに悩みながら企画はすすんでいきました。

当日は主に裏方スタッフとして参加者のみなさんや地域の方々、スタッフを見守ることが役割でした。その中で、地域の方が自信をもって東和を語る姿、参加者の方々が口々にそれぞれ見つけた「東和の魅力」を発している姿がとても印象的でした。今回の２日間のツアーで私たちが伝えたかったことをすべて伝えられたのかは正直自信がありません。しかし、この東和ツアーが参加者の方々にとって東和とつながる“きっかけ”になっていれば嬉しく思います。東和には「ただいま」と帰りたくなる、あたたかさがあります。「おかえり」と迎え入れてくれる人々がいます。そこもまた、東和の魅力なんだろうなと私は感じます。

今回のツアーでは私自身も大変貴重な経験をさせていただきました。ツアーを通じて地域の方々や参加者の方々と関わることができたこと、東和という地域に向き合いメンバーと一緒に考え続けたことが私にとってかけがえのない時間になりました。

最後になりますが、東和ツアーを催行するにあたって協力していただいたたくさんの方々に感謝申し上げます。このツアーが参加者、地域の方々、そしてスタ☆ふくスタッフにとって少しでもいいきっかけになっていれば幸いです。

これから、東和を知らない人に私はこう伝えていくでしょう。
「東和にはやりたいことを自分たちで実現させる活発的な人がたくさんいるんだよ！」
「福島大学にいて、スタ☆ふくに入っていて東和に行かないなんて絶対損してる！！」

東和田舎暮らしツアー2015 担当
福島大学３年　武藤茉奈美

４月から団体に入り、今回の東和ツアーが私にとって２度目のツアーでした。一度は経験があるとはいえ、私がプロジェクトマネージャーとなり、今まで存在すら知らなかった東和という地域に関わることに対し、「何も知らない私がツアーで地域の魅力を伝えられるのか」と、初めのうちは正直不安ばかりでした。

その後、企画担当者として地域リサーチに訪れ、東和は以前から新規就農者の受け入れや全国的に表彰されるなど地域づくり・まちづくりで有名な地域だという事、地域としても個人としても様々な活動を行っていることを知りました。また、地域の方からは「東和に人が来ることがうれしい」、「自分たちが行っている活動を知ってもらいたい」という声を聞き、ツアーを開催し人を集め、東和の活動を知ってもらうこと自体が地域のためになるのではないか、可能な限り沢山の活動を知ってもらえればいいのではないか、と考えた事もありました。しかし、何度も足を運び地域の方自身のお話を聞くうちに、その中でも「地域に生きる人々」の事を知ってもらいたいと、強く思うようになりました。

東和という地域は、これまで平成の大合併、そして東日本大震災と、ピンチに見舞われても、現状を受け入れ、その上でどうしたらいいか、東和で暮らす人々や孫子のことまでを考えている方々が沢山存在しています。自分の得意なことやできることと照らし合わせながら活動している姿勢が印象に残り、地域のためだけになるのではなく、自身のやりがいを忘れず活動している東和の人の姿を見てほしいと感じました。そのために、ツアーは地域の人との交流を多くとるよう組み、地域の方と直に関われる時間を増やすことで地域の人たちの活動に対するその姿や抱えている想いを参加者の方にも感じてもらいたいという気持ちをこめてプログラムを作りました。

当日は、地域の方にも参加者の方にも多くの笑顔が見られ交流を大変楽しんでもらえ、東和にイキイキと生きる人々の姿を多少なりとも感じてもらえたのではないか、と思っています。しかし、自分たちが伝えたかったことが参加者の方へ伝えることが出来たとは自信をもって言う事は出来ません。もっと出来た事や考えられたことがあったと歯がゆく思うことや反省すべきこともあります。今回のツアーで東和ツアーは４度目となりました。これからも継続的な関係性を築きつつ日々変化する地域の現状にアンテナを張り、寄り添う姿勢をもっていきたいです。東和は自分たちで想いを実現できるパワーを持った地域です。だからこそ、地域の発展のために何が出来るのかという視点も持ち、出来ることを模索していきたいと思っています。

最後に、今回のツアーが無事に催行できたのは地域のNPO法人の方々や地域の方々、福島交通観光の皆さま、そして参加してくださった参加者の方々のおかげです。心より御礼申し上げます。今後ともスタ☆ふくプロジェクトをよろしくお願いいたします。

東和田舎暮らしツアー2015担当　２年
プロジェクトマネージャー　渡部直子

⑦今回のツアーの価値・評価

2015 年 3 月 5 日ツアー反省会より

　自分たちがツアーを実施することにより、どのような「価値」を提供できているのか、以下に述べていきます。特に、二本松地域ではこれまで継続してツアーを行ってきています。ツアーによってどんなことが成し遂げられているのか、またツアーでなし遂げられなかったことは何か、また今後の継続していく意義も含めながら考えました。

■本ツアーによって成し遂げられたこと

(1)地域にとって

・東和の魅力の再発見・再認識できた
・食や地域産業という複数の面から地域を見せることが出来た
・実際に足を運んでしか伝えられない事を自分で直接伝えることで、
　今後の活動への意欲につながるものとなった
・地域に生きる人と地域に外の人との新たなつながりをつくることが出来た
・普段は関わる事のない地域の人同士の交流の場を持つことが出来た。
・東和のキャッチフレーズを参加者の口から直接伝える場を持てた

(2)参加者にとって

・メディアでは得られない東和の震災の影響を知ることができた
・大学での学び舎将来との関連を持たせての学びの場の提供
・農家民宿の体験
・参加者自身の今後の生き方や、将来の暮らし方のヒントの提供
・個人として福島や東和や農業に対するイメージの変化
・今後も福島、東和を応援していきたい気持ちの醸成

（3）スタ☆ふくにとって

・4 回目のツアー開催することで地域に継続的にかかわる意思表明となった
・スタ☆ふくの次世代メンバーの多くが東和とかかわりを持てた
・課題や反省点がたくさん見つかったツアーであったことで、自分たちの次の活動への原動力となる
・メンバー自身の将来の進路や生き方のヒントを得られた

■本ツアーによって成し得なかったこと

・ステークホルダーの中でも、地域活性に関するアイデア創出、ツアー参加者からの具体的な地域の良さ・特徴の提示を望んでいた人がいたが、全ステークホルダーのニーズをツアーに組み込むこと。

・現状だけでなく震災前から震災後までの活動の様子やその背景を、プログラム全体を通して伝えること。

・参加者が今後、地域にどのように関わっていくのか、具体的行動で提示すること

・地域における具体的なツアー効果の提示。

■今後のツアー展開と二本松地域との関わりについて

東和という地域は震災前のスタふくが関わる以前から住民が主体で地域づくりや町おこしをしてきた地域で、大学の研究機関など多くの外部団体との活動も行っています。また、今回ご協力いただいた地域の方々自身も、様々なイベントの開催・参加されています。そういった活動的な地域であるからこそ、地域の内側からでは見つけることのできない地域の魅力や新たなアイデアというものを求めている想いも強いのではないか、と感じておりますし、ご協力いただける関係者の数も多い地域だからこそ、地域の方の活性のイメージ・ニーズは様々です。

したがって、スタ☆ふくがツアーを開催することで、地域のリアルを発信し地域を知ってもらうことに重点を置くだけのプログラムに対して、「東和における地域活性」に本当に貢献できているのか、という疑問が湧き上がります。スタ☆ふくの中でも東和への貢献とは何なのか、活性化とは何を指すのかといった議論されました。これまでのツアーの質やスタ☆ふくのこれまでの地域に対する姿勢を振り返る事、自分たち自身が地域の様子やニーズについてより一層学んでいく姿勢を大切にしつつ地域に貢献していくためのツアーとは何か、スタ☆ふくとして東和の発展へ貢献できる関わり方という面等から、より一層地域とのかかわり方を積極的に考えていきたいと考えています。

６．広報・メディア掲載について

＜宣伝方法・経緯＞

1 月 7 日	募集開始
2 月 9 日	ツアー催行決定

・スタ☆ふく HP（http://sutahuku.jimdo.com/）
・Facebook ページ
　　…イベントページ作成、リレー投稿、参加希望者へコンタクト
・twitter アカウント（@Study_Fukushima）
　　…準備の進捗状況やツアー告知などをこまめに発信
・スタ☆ふくブログ（http://ameblo.jp/sutafuku/）
　　…事前下見の様子やツアーコンテンツの紹介などを写真と共に掲載

・テレビ局、ラジオ局、新聞社への取材依頼
・告知協力のお願い
　－福島大学教授、ゼミ
　－各大学のボランティアサークル、学生団体、
　－ボランティア、観光、日本酒に関連する団体
・スタッフの知人を通した告知

＜メディア出演・掲載履歴＞
▽テレビ
・3/7 夜 24 時～（3/8 午前 0 時～0 時 24 分）ＮＨＫ・Ｅテレ
「福島をずっと見ているＴＶ Vol.45」http://www4.nhk.or.jp/fukushimazutto/

▽ラジオ
・1 月 28 日　FM ポコ(FM76.2)
　　「ふくしま絆づくり FM 放送」
・1 月 30 日　J-WAVE
　　「JAM THE WORLD」 生放送
▽インターネット
　・FTV ウェブサイト「FTV へようこそ！」
　http://www.fukushima-tv.co.jp/visitor/2015/01/post-208.html

▽新聞

2 月 4 日　福島民報　　　1 月 21 日　河北新報

(第三種郵便物認可)

地域ツアーで触れ合いを

「会津日本酒」20、21日
「田舎暮らし」28日、来月1日

福島大の学生でつくる「スタ☆ふく」が、地元の人々と触れ合い産業や暮らしを体験するスタディーツアーを企画した。二十、二十一の両日の「会津日本酒ツアー」と二十八日と三月一日の二本松市東和地区の「田舎暮らしツアー」の二コースで、現在参加者を募っている。

ツアー打ち合わせで地元住民から話を聞く「スタ☆ふく」のメンバー(左の3人)＝二本松市

福大生企画 酒蔵見学、就農者と懇談

会津日本酒ツアーは会津若松市の末廣酒造、鶴乃江酒造、会津坂下町の曙酒造を見学し、杜氏（とうじ）や販売店など日本酒のプロとの懇親会を開く。一泊二日で参加料は一万九千二百円。五日締め切り。

田舎暮らしツアーは、新規就農者との懇談や「ふくしま農家の夢ワイン」でワイナリーの見学をする。宿泊は地元農家で民泊する。一泊二日で参加料は一万六千五百円。六日締め切り。

いずれも定員は二十人程度。ツアーを実施する福島交通観光のホームページや電話で申し込む。申し込み、問い合わせは同社　電話024(531)8950へ。

メンバーの羽賀さやかさん（福島大二年）は「夢に向かって頑張っている地域の人の姿を見て、その土地や暮らしを身近に感じてほしい」と参加を呼び掛けている。

会津日本酒　二本松田舎暮らし

風評払拭へ2ツアー

福島大生企画 参加者を募集

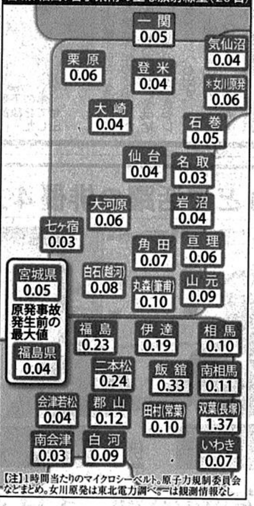
福島第1原発事故の風評被害払拭（ふっしょく）や地域の活性化に貢献しようと、福島大生がつくる「スタ☆ふくプロジェクト」が「会津日本酒ツアー」（会津若松市、会津坂下町）と「田舎暮らしツアー」（二本松市）の二つのスタディーツアーを企画した。ともに1泊2日で参加者を募集している。

「日本酒ツアー」は2月20～21日に開催。会津清酒消費拡大推進協議会が「日本一おいしい酒が飲める郷」と宣言した会津地方の末廣酒造（会津若松市）など酒蔵3カ所を巡り、試飲を楽しむ。杜氏（とじ）との懇親会もある。

「田舎暮らしツアー」は2月28日～3月1日に予定。訪問する二本松市東和地区は有機農業が盛んで新規就農者が多い。里山の生活再生に取り組むNPO法人の理事長が講演するほか、地元の農家8人が設けたワイナリーを見学する。

料金は「日本酒ツアー」（定員20人）が一般1万9200円、学生は9200円で、「田舎暮らしツアー」（同21人）は一般1万6500円、学生8500円。受け付け締め切りは1月30日と2月6日。連絡先は福島交通観光024（531）8950。

宮城、福島、岩手県南の主な放射線量（20日）



【注】1時間当たりのマイクロシーベルト。原子力規制委員会などまとめ。女川原発は東北電力調べ。－は観測情報なし

1 月 23 日 産経新聞

◇福島の「今」を感じて考えるスタディーツアー参加者募集　福島大の学生有志が震災後に立ち上げた団体「スタ☆ふくプロジェクト」が、風評被害の払拭と地域活性化を目的に1泊2日のツアーを企画。参加者を募集している。ツアーは「会津日本酒」（2月20日出発、旅行代金1万9200円）と「東和田舎暮らし」（28日出発、1万6500円）の2つ。いずれもJR郡山駅発着。学生割引も。申し込みは、福島交通観光☎024・531・8950。

７．ご協力いただいたみなさま

＜企画＞

NPO 法人 ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会
きぼうのたねカンパニー 菅野瑞穂様
めぐり農園 小林正典様
ハーモニー
ふくしま農家の夢ワイン

＜企画実施＞

(株)福島交通観光

今しかできない旅がある
若旅

2013 年 6 月には、福島県復興のために地元若者が県内外の多くの若者を巻き込んでツアーを実施している点が評価され、「第 1 回若者旅行を応援する観光庁官賞・東北ブロック賞」を受賞しました。

このプロジェクトは　住友商事「東日本再生ユースチャレンジ・プログラム―活動・研究助成―2014 年度」及び、公益法人協会「東日本大震災　草の根組織応援基金」助成対象事業としてご支援いただいております

―２日目集合写真　ふくしま農家の夢ワインにて―

８．総括

2012年4月にプロジェクトが発足したスタ☆ふくのメイン事業であるスタディツアーも今回で12回を数えるに至りました。こうしてツアーの回数を重ねながら、関係性を続けられているのは、地域関係者はじめ、毎回多くの方々のご理解とご協力をいただいているおかげです。活動を始めて、今年で3年目となる2014年度の冬季ツアーは、団体として「学生料金の導入」など、新しい試みをしたツアーともなりました。関係者への感謝の気持ちを忘れず、反省点・改善点を見つけ、新しい挑戦をし続けることが今後、一層求められると感じています。

私たちのビジョンは「先進的な地域活性化モデルとしての福島」を実現することです。これは、私たちの活動を通じて、地域が活性化するモデルをこの福島に作りたい、という思いが込められており、ツアーを通じて地域住民の主体性を引き出し、ともに地域がよりよくなる活動を起こしていく、ということです。そのなかの一つの手段として実施しているスタディツアーは、地域の情報発信になるだけではなく、外部から来た参加者との交流によって得られる新しい発見や意識の変化によって、地域の方々のモチベーションをアップさせることができているのではないかと考えています。また、地域活性化のためには、より多くの人にその地域のことや、地域のこれからの将来を一緒に考えたり、魅力を語り合ったりできるような「仲間」を増やす必要があると考えています。ツアー参加者と、地域関係者、そして私たちスタ☆ふくが、地域、そして福島の未来を創る「仲間」となるためにも、これからも引き続き、福島にいる学生として、地域が抱える震災の背景やストーリーを深く理解したうえで現状を丁寧に伝え続け、活動していきたいです。それが地域に密着したプログラム作成を行う私たちの使命だと感じています。しかし、ツアーをただ続けていくことに満足しているわけではありません。その次のステップとして、行動の変化までを見据えた地域おこしの形を模索し、新しい取り組みをしていくことがビジョンの達成の一歩、そして福島全体の活性化にもなると考えます。

前述させていただいた団体のビジョンに基づき、今回のツアーを振り返ると、果たしてスタ☆ふくのツアーを開催することが、東和の地域の方々にとってどのような効果を生み出せているのだろうか、という点が重要であり、今後さらに考えなくてはならない点です。2012年夏、2012年冬、2013年夏、そして2015年冬と二本松東和地域での開催は今回で4回目となりましたが、正直、これまで以上に東和地域とのかかわりを密に持っていきたいと感じました。それは、前回の2013年夏のツアーから今回の企画実施までの期間が、一年以上空いてしまったことに対する反省でもあります。福島大学という比較的近い位置にいる私たちだからこそ、自分たちの地域を自分たちの手で良くしたい！と奮闘する東和の方々にとってプラスになる関わり方を模索したいと感じました。年に1度、ツアーを行うだけでなく、地域の方々がそれぞれ持つ想いやビジョンをより深く共有し、まず私たち自

身が、「よそ者」なりに一番に東和の地域の未来を一緒に考える、本当に意味で東和の方々にとっての「仲間」のような存在になっていけたらと思っています。

最後になりますが、2014 年度の締めくくりとして挨拶をさせていただきます。本団体は震災後の福島を伝えたい、盛り上げたいという想いでスタートしました。活動が始まって 3 年、震災から 4 年の歳月が流れのなかで、この 1 年は特に、私たちの活動の意義やニーズが震災直後とは変化していることを実感するとともに、団体やプロジェクトの存在価値を問い直す機会も多かったように感じます。「復興」や「風評被害払拭」といった側面だけではなく、もともとの地域の魅力を再発見したり、地域で本気で課題を解決しようと活躍されている素敵な方々と出会ったりするなかで、私たちができることとは何かを常に考え、活動を続けてきました。今後も、福島の現状や社会の現状は変わっていくことでしょう。そんななかで、福島にいる学生としてできることを考え続けながら、自分たち自身が一番に福島から学ぶ姿勢を大切に、地域に密着した形で活動を続けることが重要だと思います。活動を通して地域の方々にとっての「仲間」になれるよう、一層努めていく次第です。

2015 年 4 月で、プロジェクトが発足 4 年目を迎えます。また、プロジェクトの発起人である初代代表から 2 代目代表として団体を引き継ぎ、1 年半になります。こうして活動を続けることができているのは、プロジェクト発足当初からお世話になっております福島交通観光(株)の佐藤宗様をはじめ、本当に多くの方々のご協力があったおかげです。本当にありがとうございました。手探りながらも、やるべきことを突き詰めて考え、行動を起こしていくという、時に泥臭くもありますが、情熱をもって仲間や地域の方々とともに進めていくこの活動を通して、私自身得られたものは計り知れません。まだまだ未熟な学生の集まりではありますが、今後も地域の方々との関係性を大切に、努力を続けていきます。

2015 年 4 月からは、新代表として羽賀さやかが中心となり、新体制での活動が始まります。今後も地域にとっても、活動する学生にとっても、価値のある団体として、さらに発展を続けられる姿を目指しながら、活動を続けていく次第です。今後とも何卒、ご指導ご鞭撻をいただきながら、スタ☆ふくを応援してくださると幸いです。

2015 年 3 月

代表　吉田　江里

９．お問い合わせ先

スタ☆ふくプロジェクト

２代目代表：吉田江里（～2015 年３月）
３代目代表：羽賀さやか（2015 年４月～）

住所:福島県福島市金谷川1
福島大学学生課 スタ☆ふくプロジェクト 宛

Mail:suta.fuku@gmail.com
HP: http://sutahuku.jimdo.com/
ブログ: http://jasp-sutafuku.jugem.jp/

編集
「スタ☆ふく」プロジェクト　東和田舎暮らしツアー2015 冬　担当

福島大学　人間発達文化学類２年　渡部直子（プロジェクトマネージャー）
福島大学　　　行政政策学類２年　三浦菜生
福島大学　人間発達文化学類３年　武藤茉奈美

福島大学　人間発達文化学類３年　吉田江里（団体代表）